

「その行動は矛盾している。お前はおかしい」  
昔そんなことを誰かから言われたような気がする。誰に言われたかは忘れたけど。しかも相手は一人じゃなくて、色んな奴から。

矛盾したことが好きだ。好きというか矛盾の魅力に取りつかれてやめられないといったほうがいいのかもしいかない。

会ったことのない人に一目ぼれをしたし、誰とも約束をしていないのに「待ち合わせ」をしたくなって駅に行ったり、悲しい時や辛い時ほど「楽しい楽しい」と口に出した。

自分の認識とか事実と異なることを人に語ることに不思議な中毒性がある。人を騙す才能は無いが嘘つきの才能はあったみたいで、存在しない人物や経験のことをすらすらと話すことができた。

あれは多分三月の中旬。潰れないか不安になるほどガラガラの居酒屋で、かつて友人だった男と俺は確実に頭痛をもたらす安酒とよく分からないキャベツのお通しをつまんでいた。

「そうそう、あれは確か二月の頭くらいだったかな。俺は『待つ』ってことがしたいなと思ったわけよ」

「誰を？」  
そいつが尋ねる。

『誰を』とかじゃないのよ。俺がしたかったのは『待つ』だけで、その目的に対象は必要だったんだ」

その時友達だった奴は、うっかり露出魔と目を合わせってしまった時のような顔をしていた。

「だからさ、『誰かを待ち』たかつたんじゃないかって、俺は『待ち』たかつただけなの。だから相手は必要ないん

だよ」

眉間の皺が四本くらいに増えた。

\*

一月二十五日（木）

今年こそは毎日日記をつけようと思ったのに、気付いたら一月も二十日が経過してしまった。夏休みの宿題も計画的に終わらせられなかった子供がそのまま大人になったんだから仕方がない気がする。毎日、とはいかないかもしれないがなるべく日記をつけるようにするのが今年の目標だ。目指せ真人間。

新年早々アパートの管理人から苦情の電話が来た。ギターと歌がうるさいらしい。隣に住んでる男のところには彼女らしき女が来てる時の方がよっぽどうるさいだろ、と思ったが口に出さなかったので真人間に一歩近づいた。冬になると街にカップルが増えるのではなく、人恋しくなった俺らがカップルを羨ましく思う気持ちが強まるので増えたように見えるだけなのかもしれない。

\*

「そんで『待つ』間暇だろうから、イヤフォンと文庫本だけコートのポケットに突っ込んで駅に行ったんだ。多分夜の十一時くらいだったかな。そのまましばらく本読みながら『待つ』って、薄い文庫本だったから読み切っちゃってさ。そこから音楽聞きながらひたすら改札前に立ってたのよ」

友達だった奴は黙って聞いている。

「結局二時間半くらい改札前に立ってたんだけどさ、電

車が一本来たならそれから少しして人がばあーって一気にでてくるじゃん。その電車に乗ってた人が出終わったらしばらく人が出てこなくなつて、次の電車が来たらまた人の群れが改札を一斉に出る。この感じって何かに似てるなつて思つて考えてたら気づいたんだけど、海行つて波打ち際にぼーっと立つてる時と同じなんだよな。波が足のぎりぎりまで打ち寄せたと思つたら、さーっと引いてさ。その後またこつちへうわつと広がるみたいに水が迫つてさ、また引いて。改札前と砂浜つて似てるつてことを終電無くなる頃に発見しちゃったよ」

友達だった奴は冷めただし巻きを見つめながら、口に運ぶでもなく黙つていた。俺は話を続けた。

\*

二月七日(月)

毎日日記をつけるといったのに、前回から月をまたいでしまった。今日の日記はネカフェで書いている。することが無いのでつらつらと考えたことを記す。

どうにも家に帰りたくない気分がある。どうにも家に帰りたくない気分の時が、確かにあるのだ。それは反抗期だった高校生の頃とは明確に種類の違う「帰りたくない」で、バイトで生計を立てて一人暮らしをする今の「帰りたくない」の方がより切実で本質的な嫌悪感だと言へる。

実家に住んでいた学生の頃の「帰りたくない」は本当に帰りたくないというよりも、形勢がたい苛立ちや説明できない焦燥感を「帰りたくない」という言葉と行動に置き換えて発散していただけだったと今になって思う。今の俺は家に帰ろうと小言や説教をされることはない。

「勉強しろ」「部屋を片付けろ」「ゲームばかりするな」「遅刻ギリギリまで寝るな」「朝ごはんはちゃんと食べろ」「帰りが遅くなる時は連絡を入れる」「妹には優しくしろ」「親の言うことはきちんと聞け」

全ての文言と俺は無縁だ。誰も俺のことを責めないし、責めないということは責任も持たない。生活の欠片、人生の破片、生涯の断片。

家から徒歩十分のところにあるネカフェに入ると、完全無人チェックインシステムが採用されていて、誰とも会話することなく狭い個室で夜を過ごす権利を手に入れた。都会にある自由とはこういう類の自由である。

ネカフェの個室にあるパソコンのデスクトップには、求人広告があった。

〈寮付き案件大量掲載中！〉

〈あなたが輝ける職場をご案内します！〉

作業服を着た男女が一名ずつ、さわやかすぎる笑顔でこちらにオーケーサインを向けている。

検索窓の下には「注目キーワード」としてよく検索されているワードが並んでいた。

〈中途採用〉

〈うつ〉

〈事故〉

〈早漏治療〉

ネカフェのパソコンと丸の内Bのデスクのパソコンはどちらが幸せなんだろう。どちらも不幸せだと俺は思う。遠くから聞こえるサイレンが消防車なのか救急車な

のかパトカーなのかよく分からない。

\*

「一時くらいになったら終電が無くなつて最後の波が来て、そしたらもう人が来なくなつてさ。ここは海と違つてさよな。海は波が二度と打ち寄せなくなる瞬間つてないけどさ、駅にはそれがあるから。それで終電終わつたくらいの時に駅員さんがこつち来て『あの、もう終電終わりましたよ』つて言ったんだ。俺が『あ、分かりました』つて答えたら、その駅員さんが『どなたかお待ちでしたか？』つて聞いてきたの。まあそりやそうだよな。もう構内に俺一人しかいなかったし、終電ないのに改札前の柱にもたれて音楽聞いているやついたら、そう聞くわな。でもそれ聞かれた時俺なんて答えたらいいのか全然わかんなかったんだよな。『どなたかお待ちですか』つて素直に答えたら『別に誰かを待っていたわけではないんですけど、なんだか待ちたくなつたのでずっと立っていました』つて答えになるんだけどそれって変じゃん？俺だってそのくらいは分かるから、『いえ』つて行つて駅出たんだけど、未だにその駅員さんの質問に対する答えが見つかからないんだよ。『待っているんですか』つて聞かれたら『はい』つて言える。でも『どなたかを』つて部分には領けない」

炭酸の抜けたビールが不味い。

\*

二月十八日(金)

手紙を書こうとすると生活を振り返ってしまうのでよ

くない。

『拝啓

母さん父さんごめんなさい。俺は徘徊が趣味の大人になつてしまいました。でも誰にも迷惑をかけていないので許してほしいです。』

寝る前の日課としてここ数年は懺悔を採用していたが、最近新しい就寝前のルーティンができた。年齢別の自分の死を想像することだ。例えば来年二十五歳で死ぬ場合の俺の死、四十歳で死ぬ場合の俺の死、八十歳で死ぬ場合の俺の死、といった具合にそれぞれの死、というよりもむしろ俺の死後の周囲の様子を想像する。これは決して希死念慮や自殺願望の表れなどではなく、こうすることで今の自分のことがよく分かる気がするのだ。

何年後の死を想像しづらいかは、何年後の生を想像しづらいかと大体かぶる。八十や九十で死ぬ想像は割と簡単だ。現在妻や子供はおるか恋人すらないが、なぜか想像上の八十歳の俺には孫がいて、娘や息子とその家族がそれなりの規模で葬式を開いてくれているのだ。それと二年後の死とかも案外想像しやすい。まあ今と大して変わっていない状況で死ぬのだから、今死ぬのと大体一緒だ。バイトの無断欠勤が続いて、電話にも出ないからさすがに店長がおかしいと思つて警察に連絡する。アパートを開けてみたら死体になつた俺が若干腐敗した（夏なら若干じゃ済まないが）状態で転がってる。そんなところだろう。

案外一番難しいのは三十歳の俺の死とかだ。想像がつかない。つまり三十歳の時どのような生活を送っているかを想像できないってことだ。だからその生を喪う様子も思い浮かばない。

昼飯を食おうと松屋に入ったら店内BGMに妙に聞き覚

えがあつて、いやでもクラシックとか詳しくないしなと思いつつよくよく聞いてみるとBzの『LOVE PHANTOM』のピアノアレンジバージョンだった。ギターソロのところはジャズバラードっぽいピアノソロになっていた。松屋の入り口にあるアルコール消毒は濃度が高すぎて二日酔いの時に嗅ぐと吐きそうになる。

\*

「お前の言っていることは矛盾している」

友達だった奴は、深夜の駅で俺が「待つ」ていた話を聞き終えるとそういった。

俺はびっくりした。矛盾、そうか俺は俺が駅員の問いに答えられない理由がずっと分からなかったけど、それは俺の行動が矛盾していたからなんだということをついに指摘されて初めて気づいた。友達だったやつ、でもお前はどうかやら矛盾が嫌いだつたみたいだな。

どうかお前の人生に矛盾がありませんように。俺は祈っているよ。いつだって。